



No.8. 2020. 11. 02

色彩に出会いきっかけをつくってくれたのは、高校を卒業したのちに過ごしたドイツのシュタイナー学校でした。

シュタイナー教育にはエポック授業というものがあります。エポック授業とは、1週間から2週間にわたり朝の2~3時間を使い、一つの分野を集中的に学ぶ授業です。私のいたところでも、天文学・地質学・植物学、彫像・芸術、ポトマ体操・演劇など、毎週それぞれの専門分野の先生を迎えての授業がありました。その一つとして、絵画の時間がありました。その頃はまだまだ言語を自由に操ることができなかつたことと、美術系のことがまあ得意だった(かな?)こともあり、言葉をあまり必要としない絵画の授業が始まるとのことと、とても楽しみにしていました。

いよいよ始まった絵画の授業では、白い紙を張った板がイーゼルに乗せられ、それぞれに用意されていました。そして筆と筆を洗う水の入った瓶とタオル。これから何が始まるんだろうかとワクワクしていました。なにが景色を描くのか…何かのテーマが用意されるのか…それとも自分の感情を表現したりとか…?そして皆に黄色の絵の具の液体が入った瓶がいきわたると、先生が一言。

”黄色を描いてください。”

・・・私の頭の中は”???”でいっぱいになりました。それでも”黄色を描く”ということ、自分なりにいろいろ考えた挙句、そうだ!星を描こう!と、私は画面の上のほうに大きな星を描きました。なかなか素敵な星が描けたので、満足な気持ちとともに、先生の次の言葉を待っていました。一人ひとりコメントとアドバイスに回っている先生が私のほうに来ました。そして、ちらっと私の星を見ると一言。

”これは黄色ではないわ。”

そしてあろうことか何の断りもなく、大きな星を躊躇なく消してしまいました!私は一連の出来事にびっくりしてしまい、何も言えずにいました。そこで先生はまた一言。

”黄色を描くのよ。”

そして先生はいつもの軽やかな足取りで、次の人のところに行ってしまいました。

再び真っ白になった紙を目の前に、私はとても混乱していました。黄色(い星)を描いたのに、あれは黄色ではなくて…黄色を描けて…黄色っていったいなんなんだ???考えれば考えるほどますます混乱してしまい、なにもできずにただ立ちつくしていました。頭も心も混乱したまま、ただ時間だけが過ぎていくので、まったくもって困ってしまった私は、先生の所に行き質問をしました。

”私は黄色が描けません。どうやって黄色を描くのですか?”

すると先生はなんだかとても優しい顔で、一言。

”あなたが黄色になりなさい。”

その言葉は今でもはっきりと覚えています、その言葉を聞いた瞬間はまるで脳天に大きな雷が落ちてきたような衝撃でした。あまりの衝撃に私は教室から飛び出して、自分の部屋に閉じこもりました。窓から外を眺めながら、涙が滝のように流れていました。なんで涙がこんなに出るのかよくわからなかつたのですが、たとえるならば、私の住む小さな世界を覆っている分厚い殻が、思ってもいなかつたタイミングでハンマーの一撃を食らい、うっすらと入ったヒビの間から、新しい世界の光が漏れ出している。そんな感じでした。

その後一週間、”黄色を描く”時間が続いたのですが、相変わらずよくわからず、仕上がった絵は、当時の自分の中の”上手く描けた絵”の基準からは大きく外れた出来栄えて、なんだかなあ…という最終日を迎えました。

その後、そんな出来事も忘れていたところに、ふとしたきっかけで”黄色”を思い出し、まるで偶然が重なり、そしてひたすら毎日”黄色を描く”という、なんともクレイジーな学校に5年間通うことになるのです。それが、私と色彩との出会いでした。

びっぴの森での色の時間では、”にじみ絵”という技法(水で濡らした紙に、水で溶いた水彩の絵の具をのせていく方法)をもちいて、色彩そのものを体験しています。

シュタイナーは*教育芸術についての講演会の中で

”たとえばできるだけ早く、子どもを色彩の世界に親しませるようにしたり、教師がゲーテの色彩論で述べられていることを、自分自身の深い部分に受け入れるならば、それはとても良い効果を及ぼすことになるでしょう”

という言葉を残しています。(ゲーテの色彩論についてはまた別の機会に…)

ただ、子どもたちが色彩と遊んだからといって、よい点数がとれるわけでもないし、頭がよくなるわけでもありませんし、作品も形のない色彩が混ざりあっているだけで、…大半はいろんな色が混ざり合って茶色くなくなってしまっていたり…何かや誰かが描いたものと比較しようがないし、”上手にかけたね~”などと、どこを褒めていいのかもわからない…あの絵を見て、戸惑う大人は少なくないと思います。

けれども、子どもたちは瞬間、瞬間、を生きた色彩の中で、まさに生きた体験をしています。真っ白い紙の上で広がり、互いに混ざり合い、新しい色を生み出していく色彩たちは、子どもたちの柔らかな心と重なり響き合います。そして、その体験を通して、子どもたちは”美しい”と感じる感性を自分の中に根付かせていきます。そして、”美しい”と感じる感性は、将来”生きた道徳”につながります。

ある日の色の時間に、Aくんが茶色く混ざった色彩を見て、”わ~い!悪い色だ!”と言いました。その時のAくんは、彼の中で美しいと感じないものを”悪い色”と表現したのです。私は思わずAくんに”そう!Aくん、そういうことなんだよ!”と、つい嬉しくなって言ってしまったことは置いておいて…子どもたちの中で、”美しい”と感じる感性が、この森の中で確実に育まれていると確信した瞬間でした。

：小林郁絵

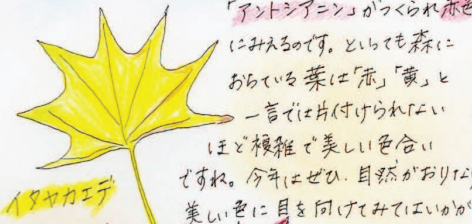
*『教育芸術 方法論と教授法』GA294

木々のみちくさ Sketchbook 11月

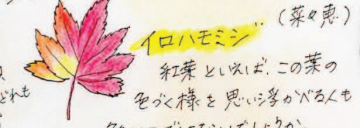
森の木々が一年で一番鮮やかに色づく季節がやってきました。
 山桜、ウレシなどの紅葉からはじまり、梨の葉、イタヤカエデ、
 ダンコウバイの黄色、イロハモミジやミズナラの赤が森を
 色どり、最後にカラマツが黄金色の雨をふらせ、森は
 静かに季節を迎えます。紅葉は葉の中にある「アントシアニン」という緑の粒が寒くなると分解され、黄色の色素「カロチノイド」が目立つようになります。そしてそこに日光があたると「アントシアニン」がつくられ赤色



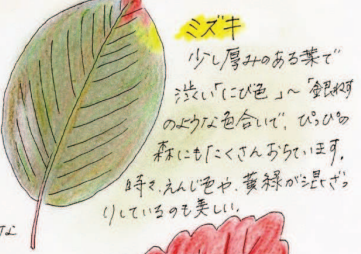
「落葉松」と書いてカラマツともよぶことある。よかに、松の中間でも落葉する樹木。軽井沢の森、浅間山一帯が11月中旬〜美しい黄金色に変わります。11は浅間山からの黄色の糸が迷いは見事!!



「葉のいろフレイド」という絵本にも登場している葉と同じ仲間の葉。単に紅葉にはカエデの種類が10種類以上もあり、皆美しく



紅葉といいますが、この葉の色が緑を思い浮かべる人も多いためではないでしょうか。黄→オレンジ→赤といふ本々様々な色が楽しめるのも魅力ですね。



少し厚みのある葉で、淡い「ひ色」〜「金銀河」のような色合いは、ひろの森にもたくさん見られます。時々、えんじ色や、黄緑が混ざりしているのも美しい。



鬼子はこの葉の色をみて「バナナみたい」といってました。森の中でダンコウバイの黄葉があると、そこだけパッと光があたるとように明るく見えます。



ほろりとしたかわいさと、どくろの葉が特徴の種類。ひろの森にはどんぐりと、ほろぼれる種類の木がコナラ、ミズナラ、クヌギと3種類あります。それぞれのだんごり、帽子、葉を拾って比べてみるのも楽しいです。



今日の Teatime ススキ茶(芒)

秋の七草のうちのヒトツデ、ススキ青の葉という意味からススキといわれるようになった。ススキの葉と水で洗ってほろろりすると香ばしく、ほろろり茶のよりに飲めやすいです。利尿、解毒作用。風邪や高血圧予防に効果的です。天日干しの必要はないのでお手軽です。

